モンゴル帝国の遺産

～ティムール朝・ムガル帝国を中心に～

第15期社会工学研究会
アジアダイナミズム班

学部生　：　高
大学院生：　阿達、禹、倉元、小柳、佐々木
須貝、菅沼、杉、二本柳、山中
指導教員：　金美徳、平石隆司

Agenda

1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）
2. 研究目的・方法
3. 研究対象
4. 2024年度のテーマ
5. フィールドワーク計画
6. 歴史年表
7. 参考文献
8. 年間スケジュール

1．振り返り（2017年～2023年　論文のテーマ）

モンゴル帝国史の7年間の研究（今年で8年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89

659

※2023年度はモンゴル帝国が衰退していく過程で、帝国の東と西でモンゴルの支配を覆した明とロシアに着目し、それぞれの権力の交代に宗教が大きな影響を与えたことを研究した

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました(2023/3/30発売 全240頁)

2．研究目的・方法

✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から**「現代的意義」**を見出す

✓ **「文献研究とフィールドワーク」**を中心に研究活動を行う

✓ フィールドワークは**「モンゴル・インド大使館」**や**「専門研究者」**にヒアリングを行う

3．研究対象【全般】：モンゴル帝国（13世紀）

13世紀

1206 年 **モンゴル建国**
1250 年 **モンゴルによるルーシ支配が徐々に確立**(徴税・徴兵)

出典：https://jugo-blog.com/history-of-asia2

3．研究対象【2023年】ルーシ地域・明（14－15世紀）

14-15世紀

1240年～1480年(240 年間)
タタールのくびき(モンゴルのロシア地域支配)

2023年はモンゴルから最初に独立した
「ルーシ(ロシア・ウクライナ)」 「明(中国)」に注目

出典：https://jugo-blog.com/history-of-asia3

■■■■■ モンゴル帝国のアジア統一時の領域

3．研究対象【2024年】ティムール朝（14－15世紀）

14-15世紀　1370 年 **ティムール朝建国**

2024年はその後のモンゴル帝国の血を引く統治者を戴いた
「ティムール朝(中央アジア)」にまず注目

出典：https://jugo-blog.com/history-of-asia3

▪▪▪▪▪ モンゴル帝国のアジア統一時の領域

3．研究対象【2024年】ムガル帝国（16－18世紀）

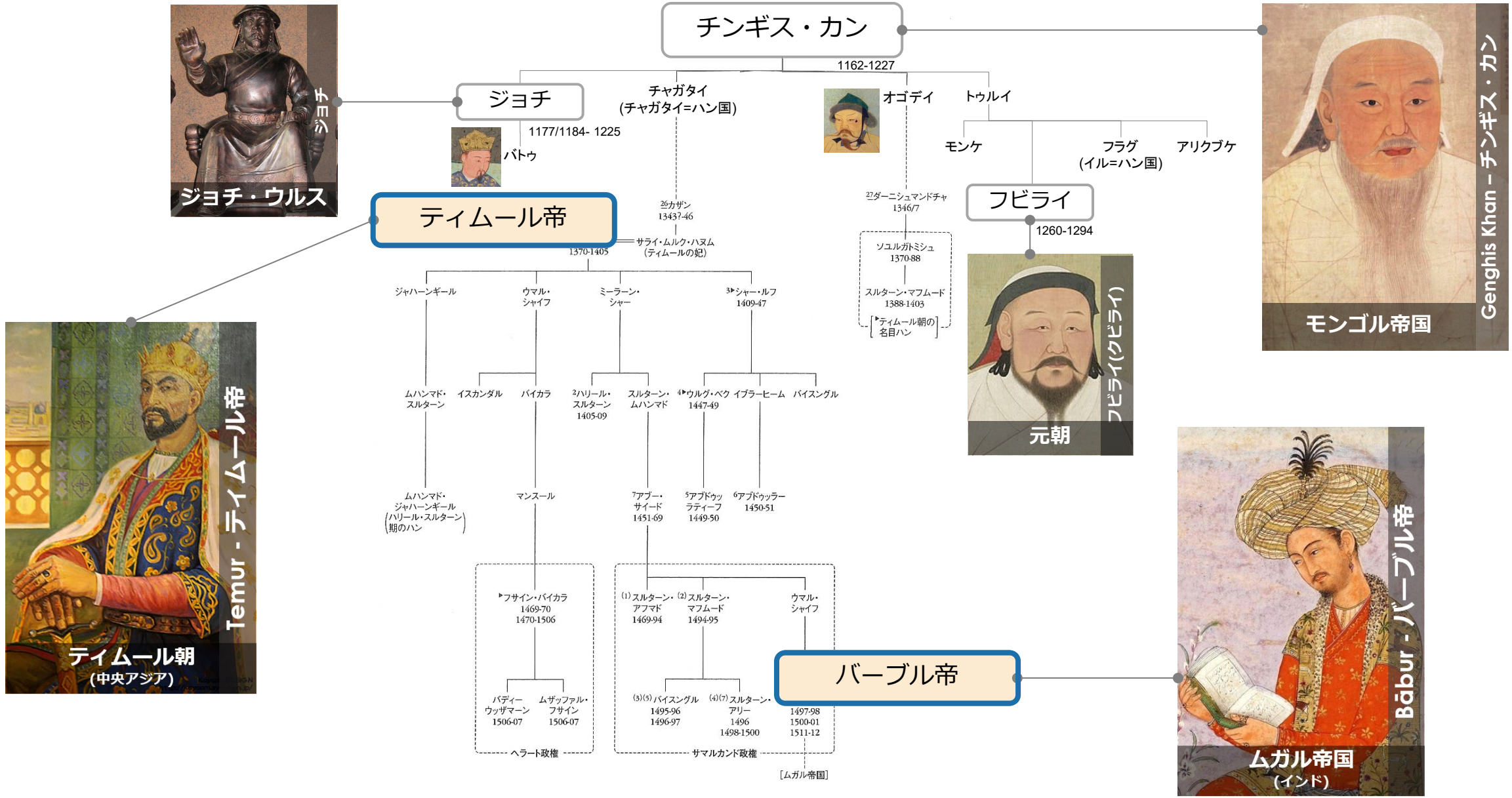
16-18世紀　　1526 年 **ムガル帝国建国**

ティムール朝に続いたのが「ムガル帝国(インド)」

出典：https://jugo-blog.com/history-of-asia3

■■■■■ モンゴル帝国のアジア統一時の領域

3．研究対象【2024年】モンゴル帝国の血縁



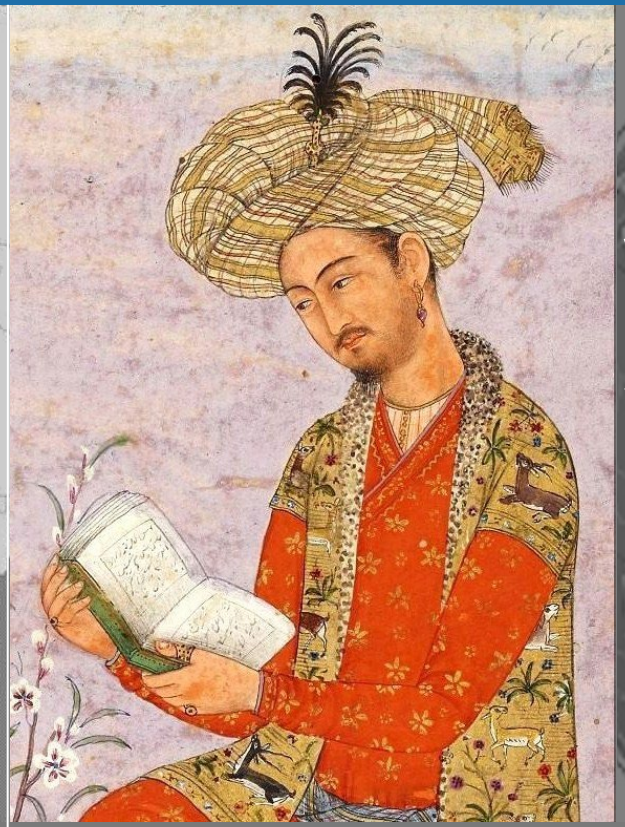
出所：https://ethnos.takoffc.info/ChingizGnlg.html

4．2024年度の研究テーマ

モンゴル帝国の遺産
～ティムール朝・ムガル帝国を中心に～

Temur - ティムール帝

ティムール朝
（中央アジア）



Bābur - バーブル帝

ムガル帝国
（インド）

出所：https://bushoojapan.com/world/asia/2019/04/09/97765　https://ja.wikipedia.org/wiki/ムガル帝国

4．2024年度の研究テーマ【ティムール朝(中央アジア)】

問題意識

- モンゴル帝国の統治システムがどのように継承されたのか？
- モンゴル帝国の交易ネットワークがどのようにティムール朝へ影響をもたらしたのか？
- ティムール朝の衰退と、陸のシルクロードの衰退との関係性は？

研究課題

- 血縁（婿殿システム）が長期に渡り活用された理由
- 政治・経済・宗教との関係性
- 陶磁器文化を通した現代への影響
- シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察

4．2024年度の研究テーマ【ムガル帝国(インド) 】

問題意識

- 中国にはモンゴル帝国の特徴が残っているが、インドではどのような特徴が残っているのか？
- モンゴル帝国とチンギス・カン血統がムガル帝国へ与えた影響は？
- モンゴル帝国がムガル帝国を経由して現在のインドにどのような影響を与えているのか？

研究課題

- 初代ムガル皇帝バーブルから見るモンゴル帝国とチンギス・カン血統への思い
- 多民族共存における文化・宗教・政治的な影響
- 中国の一帯一路政策との関係性
- ユーラシア大陸におけるシーパワーとランドパワーの影響

5．フィールドワーク計画

モンゴル大使館訪問

- ❑ リーダー　　：阿達
- ❑ サブリーダー：高
- ❑ 質問内容：
  - ・モンゴル帝国が過去から現在へ与えた影響
- ❑ 時期：７～8月

インド大使館訪問

- ❑ リーダー　　：山中
- ❑ サブリーダー：禹
- ❑ 質問内容：
  - ・モンゴル帝国がティムール朝、ムガル帝国を経由して現在のインドへ与えた影響
- ❑ 時期：7～8月

研究者インタビュー

- ❑ リーダー：杉　※サポート役：平石先生
- ❑ 候補
  - ・川口琢司（かわぐち たくじ）：著書『ティムール帝国支配層の研究』『ティムール帝国』など。藤女子大学文学部講師）
  - ・堀川轍 (ほりかわ とおる）： 論文『モンゴル帝国とティムール帝国』(「中央ユーラシア史」に収録)など。京都外国語大学名誉教授)
  - ・時期：8～11月

6．歴史年表

年代	モンゴル・中国史	ティムール史	ムガル史	日本史
8-13 世紀	705年 武則天失脚,唐の復活 755年 安史の乱 1206年 **モンゴル建国** 1271年 国名を **元** に			894年 遣唐使廃止 1185年 鎌倉幕府成立 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16 世紀	1305年 元が5つに分裂 1368年 **明 建国** 1383年 明 海禁政策開始 1567年 明 海禁を緩和	1336年 建国者ティムール(タメルラン)の誕生 1370年 ティムールがサマルカンド征服、**ティムール帝国成建国** 1393年 ティムールバグダードを攻略 1398年 ティムールによるデリー遠征 1402年 アンカラの戦い 1405年 ティムール死去 1507年 **ティムール帝国滅亡**	1483年 ムガル帝国の建国者バーブルの誕生 1504年 バーブルがカーブルを征服 1526年 第1次パーニーパットの戦い バーブルがロディー朝を破り、**ムガル帝国建国** 1530年 バーブル死去 1556年 アクバル即位 1564年 シズヤ（人頭税）廃止	1338年 室町幕府成立 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令
17-18 世紀	1616年 **清 建国** 1644年 明が滅亡 満州族である清の時代へ		1600年 イギリス東インド会社設立 1605年 アクバル死去 1658年 シャー・ジャハーンによりタージ・マハル完成 1679年 シズヤ（人頭税）復活 1757年 プラッシーの戦い	1603年 江戸幕府成立 1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令

6．歴史年表

年代	モンゴル・中国史	ティムール史	ムガル史	日本史
19-20世紀	1911年 辛亥革命 **1912年 清が滅亡** **中華民国誕生**		1803年 第2次マラータ戦争勃発 1813年 茶以外のインド貿易の独占権廃棄 1817年 第3次マーターラー戦争勃発 1853年 鉄道開通 1857年 インド大反乱（シパーヒーの反乱）が起こり、**ムガル帝国が事実上滅亡** 1858年 イギリス東インド会社解散 インド帝国がイギリスの直接統治下に置かれる 1947年 インド・パキスタンがイギリスから独立 1950年 インド共和国が成立	1858年 米修好通商条約 1868年 明治維新 1910年 韓国併合 1972年 日中国交正常化

7．参考文献 -1

【書籍：計22件】

1 ． 荒川正晴 他『構造化される世界 14～19世紀（岩波講座世界歴史11)』(岩波書店、2022)
2 ． 荒川正晴 他『モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀（岩波講座世界歴史 10 ）』(岩波書店、2023)
3 ． 荒川正晴 他『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀（岩波講座世界歴史13)』(岩波書店、2023)
4 ． 小笠原弘幸『オスマン帝国　繁栄と衰亡の600年史』(中央公論社、2018)
5 ． 川口琢司『ティムール帝国』(講談社、2014)
6 ． 辛島昇 他『南アジア史（新版 世界各国史 7)』(山川出版社、2004)
7 ． 菊池秀明『越境の中国史――南からみた衝突と融合の300年』(講談社、2022)
8 ． 木谷勤『帝国主義と世界の一体化 世界史リブレット40 』(山川出版社 、1997)
9 ． 久保一之、木村暁、井上治『ポスト・モンゴル期』(山川出版社、2018)
10 ． 黒田勝彦、小林ハッサル柔子『文明の物流史観』(成山堂書店、2021)
11 ． 小松香織『オスマン帝国の海運と海軍』(山川出版社、2020)
12 ． 小松久男 他『新版 世界各国史4 中央ユーラシア史』(山川出版社、2000)
13 ． 坂本勉『未完のトルキスタン国家』(講談社、1996)
14 ． 杉山正明『遊牧民から見た世界史』(日本経済新聞社、1997)
15 ． 杉山正明『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2018)、講談社学術文庫(2016)』(講談社 、2008、2016)
16 ． 杉山正明『「婿どの」たちのユーラシア』(講談社、2016)
17 ． 杉山正明『興亡の世界史　モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫、2016)
18 ． 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（上、下)』(講談社、35205)
19 ． 寺島実郎総監修『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリ ー（多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ)』(多摩大学出版会、2023)
20 ． 野田仁『露清帝国とカザフ＝ハン国』(東京大学出版会、2011)

7．参考文献 -2

21 . 早稲田大学モンゴル研究所編『モンゴル史研究――現状と展望』(明石書店、2011)
22 森安孝夫『シルクロード世界史』(講談社、2020)

【論文: 計24件】

1 . 小笠原弘幸『オスマン王権とその正統性――血統』(岩波書店, 岩波講座世界歴史 13, 西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀、2023)
2 . 川口琢司『キプチャク草原とロシア』(岩波書店, 岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合―9-16世紀 p.275-302、1997)
3 . 川口琢司『カラチュの時代 ―ティムール朝を中心に』(岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界――一二～一四世紀』p.295-311、2023)
4 . 久保一之『ティムール朝とその後――ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』(岩波書店 岩波講座世界歴史第11巻「中央ユーラシアの統合―9-16世紀 p.147-176、1997)
5 . 小谷汪之『ムガル帝国とマラーターの時代 p.232-272』(山川出版社 新版 世界各国史 7 南アジア史 p.232-272、2004)
6 . 小松香織著『海運資料に見るオスマン帝国末期の社会変容』(イスラーム地域研究ジャーナル Vol. 5、2013)
7 . 近藤信彰『サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13 西アジア・南アジアの帝国 一六～一八世紀、2023)
8 . 島田竜登『構造化される世界――グローバル・ヒストリーのなかの近世』(岩波書店、岩波講座世界歴史11 構造化される世界 14-19世紀 p.3-62、2022)
9 . 志茂碩敏『モンゴルとペルシア語史書――遊牧国家史研究の再検討』(岩波書店, 岩波講座世界歴史 第11巻、p.249-274、1997)
10 . 新藤義彦『モンゴル・タタールのロシア支配』(アジア研究所紀要 4 (1977年): p.129-50.、1977)
11 . 杉山正明『中央ユーラシアの歴史構図』(岩波講座世界講座11 構造化される世界 14-19世紀、)
12 . ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子『奴隷たちの世界史』(岩波書店、岩波講座世界歴史11 構造化される世界 14-19世紀、p.131-160、2022)
13 . 多摩大学 インターゼミ・アジアダイナミズム班『モンゴル帝国の興隆と衰退』(多摩大学 インターゼミ、2019)
14 . 中見立夫・濱田正美・小松久男『中央ユーラシアの周縁化』(岩波書店、中央ユーラシア史 p.143-p.173、)
15 . 林佳世子『西アジア・南アジアの近世帝国』(岩波書店、岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国――16～18世紀』、2023)

7．参考文献 -3

16 . 濱田正美『中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」』（岩波書店、中央ユーラシア史 p.277-p.341、2023）

17 . 堀川轍『モンゴル帝国とティムール帝国』（岩波書店、中央ユーラシア史 p.174-p.244、2000）

18 . 真下裕之『ムガル帝国における国家・法・地域社会』（岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界――一二～一四世紀』p.115-148、）

19 . 松田孝一『モンゴル帝国の統治制度とウルス』（岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界――12～14世紀」p.77-106、2023）

20 . 矢崎正見『チベットに対する元朝の宗教政策』（立正女子大学短期大学部 研究紀要 第14集 p.56-64、2012）

21 . 山崎岳『アジア海域における近世的国際秩序の形成――一四・一五世紀の危機と再生』（岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界――14～19世紀」p.163-182、2022）

22 . 山下範久『一四―一九世紀における「パワーポリティクス」――ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』（岩波書店、岩波講座世界歴史 11「構造化される世界――14～19世紀」p.63-96、2022）

23 . 吉澤智也『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開－21世紀のパクス・モンゴリカを求めて－』（日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33、2017）

24 . 四日市康博『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』（岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界―12～14世紀」p.40-76、2023）

8．年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備 考	議事録担当
1	2024/4/13	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性			・春学期スケジュール確定 ・参考文献）モンゴル帝国と長いその後	
2	2024/4/20	・参考資料を読んでの問題意識発表(1)	杉、二本柳、佐々木	モンゴル帝国と長いその後	・メンバー確定	杉
3	2024/4/27	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(2)	菅沼、阿達、小柳、高、禹	モンゴル帝国と長いその後	・連絡用Classroom作成（須貝） ・共同作業用Google Drive設定（杉） ・過去資料共有（杉）	須貝
4	2024/5/11	・問題意識発表(3)	山中	モンゴル帝国と長いその後	・研究計画発表準備開始（ゼミ長・副ゼミ長）	小柳
5	2024/5/18	・問題意識発表(4) ・研究計画発表へ向けたスケジュール共有	須貝 二本柳	モンゴル帝国と長いその後	・役割分担確定	二本柳
6	2024/5/25	・問題意識集約 ・テーマ案検討	ディスカッション			佐々木
7	2024/6/1	・テーマ案確定 ・フィールドワーク案確定 ・発表資料骨子検討	〃			高
8	2024/6/8	・研究計画発表資料確定（最終調整） ・発表リハーサル	〃	・大使館訪問調整 ・研究者インタビュー調整	・発表役割＆予演日程確定	倉元
9	2024/6/15	**・研究計画発表**				佐々木
10	2024/6/22	・中間発表準備	ディスカッション	〃		阿達
11	2024/6/29	・中間発表準備	〃	〃		菅沼
12	2024/7/6	・中間発表準備	〃	〃		禹
13	2024/7/13	・中間発表準備	〃	〃		山中
14	2024/7/20	・中間発表準備	〃	〃		須貝
15	2024/7/27	・中間発表準備	〃	〃		小柳
16	2024/8/29-30	**・合宿・中間発表**				二本柳

8．年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備 考	議事録担当
1	2024/9/21	・自己紹介 ・春学期成果共有			・秋学期スケジュール確定 ・最終メンバー確定	
2	2024/9/28	・追加メンバー問題意識発表				
3	2024/10/5	・追加メンバー問題意識発表				
4	2024/10/12	・問題意識集約				
5	2024/10/26	・問題意識集約				
6	2024/11/2	・発表資料骨子検討				
7	2024/11/9	・発表資料骨子確定				
8	2024/11/16	・発表資料準備 ・論文準備				
9	2024/11/23	・発表資料準備 ・論文準備				
10	2024/11/30	・発表資料準備 ・論文準備				
11	2024/12/7	・発表資料準備（最終調整） ・論文準備（最終調整）			・発表役割＆予演日程確定	
12	2024/12/14	**・Active Learning発表祭**				
13	2024/12/21	**・最終発表 ・年内論文提出**				
14	2024/1/11	・最終調整				
15	2024/1/18	・最終調整				
16	2024/1/25	**・論文最終提出16:00 ・懇親会17:00～**				

ご清聴ありがとうございました

appendix

問題意識　高 秀柄

問題意識

- 血縁・血統主義について
- 女系でモンゴルの血が他民族や他国に流れていたという事は、様々な面で確認できるのではないか。

研究を通して明らかにしたいこと

- 婿殿システムが東アジア地域にどのような影響をもたらしたのか。
- いつから血統や家柄を重視し始めたのか。
- モンゴル帝国史の変化を通じて、婿殿の役割や地位はどう変化したのか。

問題意識　阿達 敏洋

問題意識

- モンゴル帝国は地球上の約２割の領土、人民は1億超と言われる西アジア、中央ユーラシア、東アジアの３領域を1206年から160年近く、初めて統治した帝国であるが、統治に至る軍事戦略、軍事を維持するための武器、資金繰り等の仕組みがどうなっていたのか。
- 1370年ティムール朝が誕生するが、モンゴル帝国のどの部分を継承し、新たに作った統治システムは何なのか。
- モンゴル帝国、ティムール朝ともに遊牧民族としての馬の利点は軍事上、情報スピード、街作り、宗教文化上の進化はあったのか、他国制圧において、デメリットは無かったのか？

研究を通して明らかにしたいこと

- モンゴル帝国において、統治を進める上で、税収を民からどんな経路で何を集めたのか、軍隊遠征における食料確保・武器調達・格納倉庫はあったのか、自由に関所？等は通過できるのか
- ティムール朝はその仕組みを変えていったのか？
- 両国の王位継承の意義、領土拡大の大義の違いはあるのか、その後に誕生する王国にどんな影響を与えたのか考察して見たい。

問題意識　禹 幸玉

問題意識

●ムガル帝国（1526~1857)は330年の間、インド歴史上最後の帝国であるが、なぜインドにはモンゴル民族の特徴がないのか？
●中国ではモンゴル族の特徴がそのまま残っているのに、なぜインドでは同化されたのか？
●ムガル帝国の宗教・文化において、インドに残した痕跡及びその影響は何があるのか？

研究を通して明らかにしたいこと

●多民族共存における宗教と文化の影響力
●グローバル化における宗教と文化の重要性
●中国の一帯一路政策が近隣国に及ぼす影響

問題意識　倉元 貴子

問題意識

•オスマン帝国の時代、海運は、非常に重要な役割を果たしていた。特に、**貿易と交流では、**東と西を結ぶ重要な交易路であり、その中心であったイスタンブール（当時のコンスタンティノープル）港は、多くの商人や船で賑わい、多くの異なる文化が交差する場所であった。海運は、**軍事的戦略性においても、**軍事的な優位性を保つなど、領土拡大や外交政策において重要な役割を果たしていていた。海運の重要性を明らかにすることで、オスマン帝国の経済や社会構造を明らかにすることができるのではないか。

研究を通して明らかにしたいこと

- オスマン帝国の時代、海運は、どのような重要な役割を果たしていたか
- ①貿易と交流、②軍事的戦略性、③地中海の制海権
- 海運を通したモンゴル帝国との関係性
- 港の地政学
- 現代中国の一帯一路政策の港戦略

問題意識　小柳 愛理

問題意識

●モンゴル帝国衰退後も利用され続けた「カン」の血縁は、女系モンゴルの血縁が他の国・民族に入っていった歴史的背景がある。女系ということで、特に文化・工芸等で他国に影響を与えたのではないか？→**陶磁器・シルクなど**

●モンゴル帝国はユーラシア大陸全体に広がり交易ネットワークを構築していたが、モンゴル帝国に由来する文化が交易ネットワークを通じ世界へ広がり、今なお影響を残しているのでは？

●特にイスラム文化との融合にはどのようなものがあるの？

●そして日本文化への影響は？

研究を通して明らかにしたいこと

- 中国で発生した陶磁器の文化は、モンゴル帝国を通じどう伝播していったのか？
- また伝播した先では、どのように発展していったのか？
- 中でもイスラム文化との融合はどうであったか？
- 日本へはどのような影響を及ぼしているのか？

問題意識　佐々木 真友美

問題意識

- ムガル帝国の初代王バーブルはどんな人物だったか。
- ムガル帝国もモンゴル帝国とチンギス血統への尊重・顧慮が息づいていたと記されている一方、バーブルはモンゴルには嫌悪感を示し、ティムールの子孫を強調したともある。それはなぜか。
- バーブルがローディー朝の支配する北インドでの樹立に転換した理由の一つとして、北インドは中央アジアと比べると豊かだったとされているが、当時のデリー・アーグラの状況、様子はどのようであったのか。
- ムガル帝国は、後にイスラーム文化を築いていくと思うが、モンゴル調を引き継いでいる部分はあるのか。

研究を通して明らかにしたいこと

- 初代ムガル帝国王バーブルから見るモンゴル帝国とチンギス血統への尊重と嫌悪の背景
- 当時の北インドの豊かさ
- イスラーム文化でのモンゴルの影響

問題意識　須貝 直行

問題意識

- モンゴル帝国からムガル帝国を経由し現代のインドに与えた影響はどのようなものか
  - 文化的
  - 宗教的
  - 政治的
  - 経済的

研究を通して明らかにしたいこと

- 文化的影響：タージ・マハルやウルドゥー語など、名残りは現代のインドにも残っているが、建築、言語、文学、料理、音楽、芸術などの分野で、イスラム文化とヒンドゥー文化の融合はどのようにおこなわれたか
- 宗教的影響：宗教寛容政策を採用し、両者の対立を和らげ、ヒンドゥー教とイスラム教の融和を目指したのか
- 政治的影響：北インドを中心に領土を拡大し、政治的統一を目指した。バーブルやアクバル大帝などの君主は、群雄割拠する封建勢力を統一し、経済的な繁栄を目指したのか
- 経済的影響：インドと中央アジア、ペルシア、アラブ諸国との貿易が発展し、香辛料や綿花、真珠などの高級品の輸出が行われているが、どのように進めたのか

問題意識　菅沼 孝陽

問題意識

- モンゴル帝国は宗教的に寛容だとされるが、その宗教政策は大帝国の統治にどんな役割を果たしたのか。
- モンゴル帝国とヨーロッパとの外交使節往来をもたらした、ネストリウス派キリスト教（景教）とは何か。
- カトリックでもプロテスタントでもない、東方キリスト教諸派が過去の歴史と現代に与えている影響は何か？
- いまだに宗教対立が戦争を引き起こしている現代世界にあって、グローバルサウスは宗教的に寛容なにか否か。

研究を通して明らかにしたいこと

- ネストリウム派キリスト教の発生とその教義、ユーラシアへの伝播、受容された理由と実態
- モンゴル帝国（とその後継国家）における宗教政策と、キリスト教の影響
- プレスタージョン伝説（寺島学長著『人間と宗教』P54、55）と、モンゴルとヨーロッパの外交使節往来の実態と意義（杉山正明著『モンゴル帝国と長いその後』第六章を中心として）
- イスラム勢力へと対抗軸としてのモンゴル帝国（とその後継国家）に対するヨーロッパの期待と影響

問題意識　杉 由紀

問題意識

●モンゴル帝国の特徴の一つとして、ユーラシアの幅広い地域に広がった貿易網がある。モンゴル帝国が分裂した後、中央アジアで登場したティムール帝国、その子孫が南アジアで興したムガル帝国で、貿易網はどのように変化したのか、しなかったか。それらの国々の興亡から、貿易(経済)はどのような影響を受けたか。
●ムガル帝国時代は、四帝国時代(明・ムガル・オスマン・ロシア)とも言われるが、欧州諸国のインド洋進出の時期と重なる(ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマ船団は1498年にカリカットに到着)。４帝国のパワーバランス、欧州諸国がもたらした変化は、貿易にどう影響したか。
●モンゴルとその後継国における政治と経済の相互作用を理解することで、現代の世界貿易の変化の理解を深められるか。

研究を通して明らかにしたいこと

●モンゴル帝国分裂後、ユーラシアに広がった貿易網はどのように変化したか。
●モンゴル貴族の血筋をひいたティムール帝国は、その衰退要因として「陸のシルクロードの衰退」が指摘されている。ティムール帝国の衰退要因はそれだけか。他にもあったのか。
●ムガル帝国時代の貿易網はどう変化したか。その要因として、技術の変化、取引手法の変化、四帝国および欧州諸国のパワーバランスはどう影響したか。

問題意識　二本柳 誠一

問題意識

- シルクロードの歴史の中で、ほぼ完全に一つの国家によって制御されていた時期がある。6世紀にはトルコのハガネート、13世紀の第2四半世紀にはチンギス・ハンが率いるモンゴル帝国、14世紀の後半にはティムール帝国によって制御されていた。
- モンゴル帝国やティムール帝国がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していた商人がどのような行動をとっていたかを研究し、ツーリズムの起源を考察する。

研究を通して明らかにしたいこと

- シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する。
- そして、この考察を通して日本におけるインバウンド市場への何らかの提言に繋げたい。

問題意識　山中 眞太郎

問題意識

● <遊牧騎馬軍団・モンゴル帝国の軍事戦略> 紀元前800年より遊牧騎馬社会が成立しスキャタイから匈奴騎馬軍団が継承しユーラシアにおける遊牧騎馬軍団の絶対優位を確立。遊牧民が軍事力を持ってオアシス経済を握るという遊牧国家パターンを成立。その後モンゴル帝国においては、他国圧倒する軍事力によりユーラシア大陸を支配した。圧倒的な軍事力で「モンゴルの恐怖」をつくりあげ、戦わずして経済、文化、人材を手に入れ経済支援国としてきた。

● <江南・雲南エリアの重要性> 雲南エリアはクビライが後理国を制圧し明に奪われるまでジャムチとしての中継拠点、金銀の鉱山の開発拠点として重要な役割を果たしてきた。

● <ランドパワーから見るユーラシアの歴史観> ヨーロッパから見るユーラシア大陸の歴史は15世紀以降のシーパワーの歴史を肯定するものであった。これに対し17世紀以降のランドパワーを肯定するロシア、中国、インドはユーラシアの歴史をどう捉えているのか。

研究を通して明らかにしたいこと

●モンゴル帝国の軍事戦略が現代のロシア、中国等に与えている影響を考察してみたい。

●現在一帯一路政策においても重要な拠点となっている江南、雲南エリアの重要性にについて考察してみたい。

●ユーラシア大陸におけるシーパワーの歴史観に対し中国、ロシア、インドのランドパワーの国々の歴史観の相違、同一性を確認し今後の国家戦略を考察してみたい。